『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』は、レミ・シャイエ監督の2015年フランス - デンマーク合作の２Ｄアニメーションです。本作はアヌシー国際アニメーション映画祭で初演され観客賞を受賞、TAAF（東京アニメアワードフェスティバル）2016では見事グランプリを受賞しています。ジブリの高畑監督はじめ、日本での一般公開を望む声が高かった本作ですが、いままで実現に至りませんでした。この度、異色の長編パペット・ムービー『ホフマニアダ　ホフマンの物語』の配給でもある株式会社リスキットが本作品の権利を取得し、9月東京都写真美術館を皮切りに順次全国公開をする運びとなりました。単純化された画風と、高度に構成された構図によって紡がれる物語は、日本アニメの黎明期の東映動画の作品群を彷彿とさせる作品であり、その秘めたる作品力は、この秋、公開が相次ぐ“海外アニメーション作品”の中にあって、まさに、ダークホース的な存在です。

なお、本作はフランス語日本語字幕版に加え、日本語吹き替え版も制作予定です。

（2015年・フランス・デンマーク・シネマスコープ・81分）

© 2015 SACREBLEU PRODUCTIONS / MAYBE MOVIES / 2 MINUTES / FRANCE 3 CINÉMA / NØRLUM.

あらすじ

舞台は19世紀ロシア、サンクトペテルブルグ。

14才の貴族の子女サーシャには悩みがあった。1年前に北極航路の探検に出たきり帰ってこない大好きな祖父。探索船は出たものの未だ行方が分からない。祖父と家族の名誉は失われ、祖父の名を冠する予定だった科学アカデミーの図書館も開館が危ぶまれている。ロシア高官の父は、そんな状況にあって、なんとかローマ大使の道を模索するが、そのためには社交界デビューの娘が皇帝の甥っ子に気に入られるしかないと考えている。

社交界デビューの日、サーシャは祖父の部屋から航路のメモを見つけ、それが捜索船がたどったものとは異なる事に気付く。再び捜索船を出して欲しいとサーシャは舞踏会の場で王子に懇願するが受け入れられない。王子の不興を買い、父からの叱責を受けた娘は、自ら祖父の居場所を突き止めようと決意する。――サーシャが目指すものは、祖父との再会、それが叶わなくとも遭難した艦船ダバイ号の発見、そして何よりも真実を突き止める為の旅だった。

なんとか港までたどり着き、北方行きの商船ノルゲ号に乗せて貰おうと船長の弟に話しを持ち掛けるが、手違いもあり港に取り残される。食堂の女主人オルガの手助けにて、住み込みで調理や給仕といった未経験の仕事をしつつ船の戻りを待つ。その頑張りが認められようやく船に乗り込んだ後に待ち受ける多くの試練。船乗りの経験も無く、しかも女性であるサーシャには、想像を絶する困難が待ち受けていた。

そして――

クレジット

タイトル： ロング･ウェイ･ノース　地球のてっぺん
英語タイトル： Long Way North
原題： TOUT EN HAUT DU MONDE（世界の頂点で）
（2015/フランス･デンマーク/81分/シネマスコープ）
※フランス語／日本語字幕版／日本語吹替え版
©2015 SACREBLEU PRODUCTIONS / MAYBE MOVIES / 2 MINUTES / FRANCE 3 CINEMA / NØRLUM
©2015 SACREBLEU PRODUCTIONS 他　表記可

監督： レミ･シャイエ
脚本： クレール･バオレッティ／パトリシア･バレイクス
作画監督： リアン-チョー･ハン
音楽： ジョナサン･モラリ
配給： リスキット／太秦
特別協力： 東京アニメアワードフェスティバル
協力： キャトルステラ／スタジオ Jumo／Stylab

主な受賞歴

アヌシー国際アニメーション映画祭2015　観客賞

東京アニメアワードフェスティバル2016 グランプリ（東京都知事賞も）

他

登場人物紹介

サーシャ　Sacha

ロシア、サンクトペテルブルグの貴族の家庭に生まれた14才の少女。よく探検旅行の話をしてくれた祖父オルキンを慕う。サンクトペテルブルグ市内を流れるネヴァ川沿いの大邸宅で暮らす。2年前、祖父オルキンは壮麗なダバイ号で北極遠征に出た。祖父の勇敢さと辛抱強さを受け継ぐサーシャはその祖父の船を見つけ出すため危険を冒して「地球のてっぺん」を目指すこの大冒険に出る。

オルキン　Oloukin

サーシャの祖父でロシア海軍大尉。海上遠征で生涯を海で過ごす運に恵まれた探検家。不在の多い父親であったが祖父としては愛孫サーシャと多少なりの時間を共にした。徹底主義者で長年の夢である北極点を征服するためならどんな危険をも冒す覚悟でいた。オルキンは気丈で揺るぎなく頑固なタイプで相手が権力者でも怯まずに思ったことは口に出すため宮殿には敵もいた。

サーシャの母　Mère

オルキンの娘でありサーシャの母。不在がちだった父親のことはあまり知らない。貴族的伝統を受け継ぐサーシャの母は夫に対し従順である。娘を守ろうとするが、頑固で情熱的なオルキンの血をサーシャが受け継いでいることもちゃんと気づいている。

トムスキー王子　Tomsky

皇帝の甥で科学顧問に任命される。策略家で陰謀を企てることを好む。その昔オルキンに叔父を侮辱されたため科学アカデミーの図書館が「オルキン図書館」とその名を冠することは我慢ならない。サーシャの失策を口実に一悶着起こしチェルネソフ家を失墜させる。

サーシャの父、イヴァン・チェルネソフ　Père, Ivan Tchernetsov

サーシャの父、ロシア高級官僚。在ローマのロシア大使に任命されることを願う。皇帝の甥トムスキー王子の宮殿入りを知ると自身の大使任命の日も近いと考える。しかもサーシャを気に入ったと察し…皇帝一家に近付ける良い縁談になると期待する。

ルージン　Loujine

トムスキー王子の秘書で、やや心ならずも陰謀に荷担する。主人の身を案じる一方でサーシャとその家族に対する不正もよく承知している。

ナージャ　Nadja

サーシャの友人。ドレスや舞踏会に憧れる少女。トムスキー王子のことをとても魅力的だと見立てる。

オルガ　Olga

アルハンゲリスク港の食堂(オーベルジュ)の女主人。シベリア海や北極を目指す途中に寄港した船員にいつも楯突き、飾らない筋金入りのオルガだが、落ち込むサーシャに心を揺さぶられ食堂で働く機会を与えさらには愛着を感じてルンドの船に乗る手助けをしてやる。

ルンド　Lund

ノルゲ号艦長。ノルゲ号は北極海の港から港へと貨物を運搬したり極地動物の皮を求める猟師を運ぶ船。ルンドは寡黙ながら乗組員の信頼は厚い、ただし弟ラルソンには非常に厳しい。同兄弟二人がノルウェー人の父からノルゲ号を相続したが、真面目で船乗りの資質があるルンドが艦長となる。

ラルソン　Larson

ルンドの弟。遊び人で女たらし、ややペテン。兄ルンドが追い出さなきゃいけなくなるような微妙な状況に度々身を置く。ルンドが流氷の上を歩き負傷すると乗組員を指揮する立場となり真価を発揮する。

カッチ　Katch

見習いの少年水兵。船の清掃や野菜の皮むきなど面倒な仕事を担当する。大物ぶるが心優しくまだ幼さもある。

声優（フランス）

サーシャ： クリスタ・テレ……(Christa Théret)
オルクリン： フェオドール・アトキン……(Féodor Atkine)
カッチ： トマ・サンゴル……(Thomas Sagols)
ラルソン： レミ・カイユボ……(Rémi Caillebot)
ルンド： ロイック・ウードレ……(Loïc Houdré)
ナージャ： オドレイ・サブレ……(Audrey Sablé)

しミ・シャイエ監督 略歴

芸術学校でデッサンを学んだ後、複数のアニメのストーリーボード、レイアウト、特殊効果を担当。そしてフィリップ・ルクレルク監督の「The Rain Children（仏原題Les enfants de la pluie）」といった長編作品のレイアウト班に加わった。その後は監修のためアジアに数度渡るが、2003年にはアニメーション映画学校ラ・プードリエールに入り、短編映画「Le Cheval Rouge」、「Grand-Père」（Canal J）、「Eaux-Fortes」の三作品を制作する。

その後はトム・ムーア監督の『ブレンダンとケルズの秘密』の助監督兼ストーリーボードを担当するなど経験を積み、ついに『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』の監督兼原画家となる。現在は新作『Calamity』を製作中。開拓時代のアメリカ初の女性ガンマンとして知られるカラミティ・ジェーンの少女時代を描く本作は2020年完成の予定である。

解説

井上俊之〈アニメーター〉

2015年暮、私はTAAF(東京アニメアワードフェスティバル)2016の長編アニメ部門コンペティションの審査委員を安請け合いしてしまったことを後悔していた。ちょっとした「下心」があったこともその後悔をより大きなものにしていた。その年(2015年)公開された長編アニメでは『百日紅』『バケモノの子』の2作品に関わっておりそれらもエントリーしているに違いなく、関係者である私はその審査免除のはずなので、観るべき作品はせいぜい数本と予想。しかもその時脚本家岡田麿里さんの初監督作で一緒に仕事を始めていたにもかかわらず、まだ未鑑賞なことに後ろめたさを感じていた彼女の脚本作『心が叫びたがっている』も入っているだろうからこれを観る絶好のチャンスと考えたのである。しかし後日送られてきた審査対象作品のリストを見て愕然。リストには観たことも聞きいたこともない海外作品ばかりがずらり、その数20数本！何かの間違いかと慌てて確認するとTAAFの長編アニメコンペとは日本未公開の「海外」作品のコンペとのこと。それらを本審査のために4本選出する一次審査が私(を含めた４人の委員)のミッションなのでした。そもそもの前提を「勘違い」していたのです。私の浅はかな「下心」も儚く消えたのでした。しかし引き受けたからには審査するしかないと、「ながら観」でどんどん消化していくことに決めたその初日、食事をしながらある作品を観始めて、そのただならぬ出来映えに箸が完全に止まりました。その作品こそが「Tout en haut du monde(ロング・ウェイ・ノースの仏原題)」でした。心して観るべくさっさと食事を済ませ集中して観始めて改めてそのクオリティに驚きました、内容はフランス語のまま(一次審査段階では翻訳されていない)でしたので完全には理解できないまでもその映像の力は絶大でした。近年、海外の否ディズニー／ピクサー系の作品、特に手描きによるアニメーション作品がフランス語圏を中心にその内容、作画のクォリティ共に充実 してきていることは感じてはいました。

私見ではそれはフランスのシルヴァン・ショメ監督の『老婦人とハト』(1996)あたりから始まり、その後の同監督の『ベルヴィル・ランデブー』(2002)『イリュージョニスト』(2010)でいよいよ確かなものになった様に感じました。今作も制作を担っているのはまさにそのフランス語圏を中心としたヨーロッパのクリエーターが占めている様です。さらに最近では日本の「アニメ」からの影響がジブリ作品はもちろんのこと、それ以外のマイナー(？)な作品の内容面だけでなく、欧米とは違った進化を遂げた日本のアニメ作画スタイルをも取り入れ進化させたものも見られる様になって、さらに面白く活況を呈しています(今作にも『わんぱく王子の大蛇退治』などのデザインの影響が見て取れます) さて、選別の方はと言うと早い段階で今作に出会い他作品を見る期待がぐっと高まったおかげで思いの外サクサク進みましたが、結局のところは一通り見終えても今作が一番素晴らしく、私の中ではグランプリはこれだとさえ思えました。とはいえ、それを決めるのは本審査の委員の方々に委ねるしかなく翌春3月のTAAF当日まで気を揉みましたが、結果はやはりグランプリとなったのでした。

その作風については、なんと言ってもシンプルなデザイン性がキャラクターと背景に共通でそれが徹底されていることがまず驚きでした。キャラクターと背景が一つの画面を構成する要素として同質であることは、本来当たり前のことですが、商業アニメ制作においてはキャラ作画と背景は分業するのが通常で、作画を担うアニメーターと背景画家の方の美意識、画力、描法が違いますので同質を目指すこと自体相当な努力が要ります。特にアナログ時代の作り方(キャラはセル画、背景は紙にポスターカラー)では非常に困難なことで、好例としてはディズニーの『101匹わんちゃん』などをあげることができますが、日本の制作現場ではこれまで「背景と同質だとキャラが画面の中で埋没してしまい追いづらい」等といった一見もっともらしい理由がそのための努力をしない言い訳の様に使われていましたし、私もそれ自体一定の説得力を持っている様に感じていました。今作ではキャラクターに実線の主線がなく色面だけで描かれ、背景もグラデーションすら全く用いず徹底して色面だけで描かれているにも関わらず、キャラが背景に「埋没」して「追いづらい」ということは全くありません。デジタル制作ならではの特殊効果なども全くと言って良いほど使われていないため、劇場の大画面では「持たない」のではと思う制作現場の方がおられるかもしれませんが、そんなことは全くなく、素晴らしいレイアウト(画面構成)の、特に終盤は荒涼とした氷だけの世界が展開するにもかかわらず、そのリアリティ、臨場感、色彩の美しさは圧倒的でむしろ大画面で見ることお勧めしたいです。
内容に関しては観ていただくのが一番ですが、なんと言ってもフランス語版(主人公のサーシャのハスキーボイスが可愛い！)のまま見てもほぼ理解できるセリフに頼らない映像作品としての完成度の高さ。一途な主人公サーシャの冒険の絶望の果てに訪れるその奇跡的な瞬間、ぜひサーシャとともに体験していただきたい。BGMに頼らず、ほぼ環境音だけで進行する中、時折入る音楽がそれだけにとても効果的で、昨今映画に溢れるBGMにやや辟易する者としてはそれも好印象でした。

TAAFグランプリ受賞からすでに3年、今作が日本で支持されること願います、いや、支持されるべきと思います。故高畑勲監督も今作が公開されないこと残念に思っておられたと聞きます。私はすでに5回見ていますが、劇場で公開された際には6回目を見たいと思います。

最後に、公開に向けて尽力いただいた方々に、『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』を応援してきた者として感謝いたします。

『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』は嘘がうまい

2016年7月28日　アンステチュ・フランセ　　高畑勲監督応援スピーチより

東京アニメアワードフェスティバルでグランプリ受賞の本作の上映会が開催され、高畑勲監督が応援スピーチに登壇されました。監督はその時点で配給会社が未定で、日本での一般公開の予定がたっていないことをとても残念がっておられました。また、本作の魅力の一つとして“単純さ”という点に着眼され「女の子が頑張る姿を追いかけ、それに応じて周りの人たちが変わっていったり、状況が好転したりしながら、最後には目的を達成する。ただそれだけの話といえばそうですが、この単純さがすごく大事です」と評価されました。また、「見ていて気持ちが良かった。作品の中でいっぱいウソをついていて、それは日本のアニメも同じだけれど、このウソのつき方は気持ちがいい」と本作の魅力を語られました。

そこで、本作のウソをいくつか紹介します。

※ 物語の中で、痛み止めとしてペニシリンを使用していますが、ペニシリンの発明は30年後。
※ 北極圏はもっぱら流氷に覆われており、ところどころに氷丘や氷丘脈があるが10数メートル級の氷山は存在しない。
※ 祖父オルキンとの吹雪の再開シーン（その虚実のバランス）

さぁ、ぜひ、あなたも『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』の気持ちのいい“嘘”を発見してください。

プロダクション・ノート

原案

1915年南極遠征中に起きたアーネスト・シャクルトンのエンデュアランス号の難破

『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』は元々、脚本家クレール・パオレッティが発案したもので、流氷に遭い行方不明となった祖父を探しに旅立つロシア貴族の少女を描く長編アニメーションの企画だった。2005年執筆に取り掛かったパオレッティは、スタジオ・フォリマージュが設立したアニメーション学校ラ・プードリエールでレミ・シャイエと出会う。本企画の提案にシャイエはすぐに興味を示したが、それはちょうど少し前にイギリス人探検家アーネスト・シャクルトンの航海日誌（数々の極地探検のうちエンデュアランス号の南極遠征）を読んでいたからで、19世紀を舞台にした当案を評価した。シャイエはイリヤ・レーピンの絵画をはじめ19世紀ロシアの画家に影響を受けたと自称している。パオレッティとシャイエは共にこの企画に乗り出し、思い付くことや考えを出し合い文書を交換しあった。企画はゆっくりと具体化していき原案からは大きく異なる作品に仕上がった。

脚本

パオレッティは初稿を書き上げると国立映画センター（CNC）に企画を申し出るが再考を求められる。そこでパオレッティは共同執筆者としてパトリシア・バレイクスを迎える。バレイクスは多数の新たなアイディアを提案する。しかし両作家とシャイエはストーリーに満足ができずにいた。ヒロインに感情移入できないでいたからだが、とりわけこの執筆段階では挑戦が失敗に終わることが問題であった、というのもサーシャは祖父は生きていると主張し続けたのに結局はその祖父の死を知ることになるからだ。そこで三人目の共同執筆者として迎えたのがファブリス・ド・コスティルで、彼はダバイ号を探す角度からストーリーを書き直し、結末はポジティブになった。またオルガという新たな人物や、ルンドとラルソンなる兄弟の確執を書き加え、サーシャの旅は船員仲間のいない祖父の航海とは対照的に集団の凝集性がいかに重要かを学ぶ旅へと方向付けた。

資金調達

2008年パオレッティとシャイエは、制作スタジオSacrebleu Productionsに連絡を取り、作品に必要な資金の調達を共にはじめる。シノプシスのリライト段階ではMaybe Moviesスタジオも参入した。2012年にはシャイエの画風を残したまま3分のパイロットムービーを仕上げ、これがきっかけでテレビ局France 3とCanal+からの出資を獲得することになる。制作の大半はフランスであったが、2013年以降はデンマークのNorlumスタジオの協力も得ており、フランス＝デンマーク合作となる。『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』に集められた資金はおよそ六百万ユーロ（7億2千万円）という限られた予算であった。

声と音響効果

本作吹き替え収録は映像が作られるずっと前で、そのため声優は演じる役やシーンを想像しながら監督や脚本家の協力を得ての録音であった。これがその後の決定事項に向けてどう方向付けるかその可能性を提案し合う機会となる。収録はメンバーには時間がなく集中的に行った。

多くの音源は、ルクーブランス号で収録した。船員の様々な日常の動作、所作を撮影し、また本作の音の世界観を形成するに役立つ様々な音源（ドアの開閉や揚げ板に響く音、船体やロープの軋む音、帆が立てるパタパタとそよぐ音など）を収録した。

多くの音源はルクーブランス号の船上で収録

映像

本作の視覚的な世界観は時間をかけてつくられた。シャイエの絵はかなり写実的だがアニメーションの制約に応えるべく単純化させる必要がある。当初シャイエは、自身も参加した『ブレンダンとケルズの秘密』の作風からの影響が残っていたが徐々に遠のいた。最終的には線を消しフラットなベタ塗りに仕上げた。シャイエは細部のリアルさに拘ることよりも人物の感情描写に注力することにした、つまりは衣服のシワやボタン、靴紐といった多くの線が廃し単純化を極めたものにした。2016年3月 Cartoon Brew のインタビューでは次のように説明している「現実世界を複製すること、照り返しだとか何もかも、、、そういったことにはさほど興味はありません。サーシャの髪一本一本を表現することに予算を割きたくはないのです。シンプルなヘアスタイルは風が吹くリズムと調和して作品に詩情性を与えます」。

シャイエは本作のグラフィックスタイルを最終的に決定するにあたり多くのデッサン画家の力を借りている。色の美術監督 Patrice Suau は米鉄道会社の1940年代のポスターにある鮮やかな色を配したシンプルな絵を参考にスタイルを見直した。

アーティスト、それにアニメーターたちはパソコン上で作業したため、シャイエはペーパーゼロの作品だと『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』を紹介する。

ストーリーボードとモンタージュ

アニメーション制作に本格的にとりかかる前に、制作チームはアニマティックという声や音響を加え映像化したストーリーボード（絵コンテ）を作る。完全なアニメーションを作るのは費用がかかるが、アニマティックの簡素なスケッチであらゆるテストができ、本格的な制作に入る前にモンタージュをほぼほぼ確定するのに役立つ。絵コンテは Maïlys Vallade とリアン-チョー・ハンの二人のアーティストが、編集は Benjamin Massoubre がおもに担当、同三人と監督シャイエ、共同脚本ファブリス・ド・コスティルのメンバーで、いわばアニメーション前最終版となるものを作成した。

アニメーション

スウェーデンのブリッグ帆船、トレ・クロノール号

本作の映像化はスタジオ2minutesの協力を受け大半はフランスで行った。制作チームはパリのスタジオに集まったが、絵の構図（レイアウト）を担当するデッサン画家（イラストレーター）15名、アニメーター20名、アニメーション作家20名である。シャイエはチームがそれぞれ公平なポストにつき男女同数になることに拘った。単色ベタ塗りで構成される本作には技術的な制約があった、というのもデッサン画家は線を描くが、アニメーターはそのデッサンを受け再度ベタ塗りを残して描き直すからで、そこには判別できるよう仕上げるために特に注意が必要となるからだ。アニメーターとアニメーション作家は作業の便宜上ペアを組ませた。ストーリーボードの構想にも参画していたリアン-チョー・ハンがアニメーションを監修し、構図（レイアウト）や画像へのキャラクターの取り込み（ポージング）を調整する。リアン-チョー・ハンは異なるデッサンをあまり使用せずに人物の感情を効果的に表現する節約技術で予算問題に立ち向かった。また監督は予算不足から動きのある照明効果を入れることは一部を除き断念することになった。2013年からはデンマークのスタジオNorlumも参入し、以降、リアン-チョー・ハンは二つのスタジオを調整することになる。

作中登場する船をはじめ列車やそり、馬車といった乗り物はCGでモデリングしてからベタ塗りにした。またサーシャが乗り込むノルゲ号の外観についてはいくつもの案が次々と出された。シャイエはまずシャクルストンのエンデュアランス号での遠征を撮影したフランク・ハーレイの写真を参考にした、しかしこの船はマスト三本の船で定員は40名ほどとなりアニメ化する人数が多すぎる問題があった、そこでシャイエは船好きのアニメーター セバスチャン・ゴダードに声をかけ、スウェーデンのトレ・クロノール号の図面から蒸気推進を搭載した2本マストの帆船を思いついたのです。

音楽

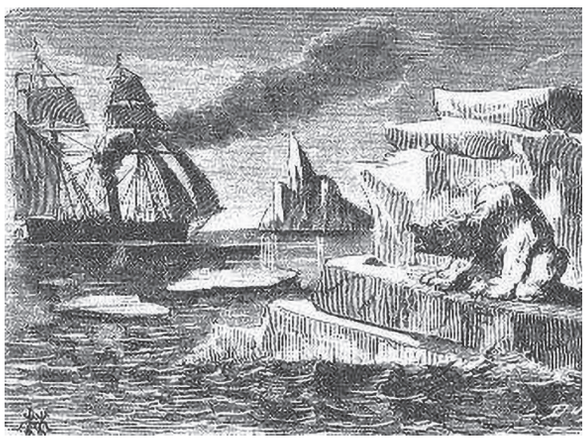
レミ・シャイエはロシア音楽の模倣や冒険映画にありがちな音楽ではない対位法を奏でるサントラを希望。音楽グループのシド・マターズの作曲家ジョナサン・モラリに連絡をとった。アニマティックには同グループの曲だけを用い、後に挿入される音楽のイメージを伝えている。その後ジョナサン・モラリは本作のサントラを作った。アニマティックでもサーシャの逃走シーンには同グループのポップ＆ロック調の英語の歌詞のついた曲が使用されていたが、これに満足したシャイエは最終版サントラにもこの曲を残した。

批評

フランス国内

『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』はフランス国内をはじめ各紙面で高く評価された。

- *ときに敢然と穏やかなペースになる様は流氷の海を辛抱強く渡る砕氷船のようである*〈リベラシオン〉
- *ジュール・ヴェルヌの冒険譚を読む時の至福の時間のようであった*〈ルモンド紙〉
- *パステル調ベタ塗りの力強い映像が臨場感ある音源と調和している*〈ラ・クロワ誌〉
- *主人公サーシャはアニメ界の最も魅力的なヒロインとなる要素全てを兼ね備えている*〈文芸誌テレラマ〉



ジュール・ヴェルヌ「ハテラス船長の冒険」の挿絵、Riou et Montaut 作 (1866).

その他の国

- *ミニマムで詩的なビジュアルと息をのむような大胆さの融合*〈ハリウッド・リポーター〉
- *うっとりする映像美、サントラも効果的だ*〈スクリーン・デイリー〉
- *本作の魅力は勇敢な少女と、まごうことなき見事な映像*〈ザ・ガーディアン紙〉
- *観るものを熱中させ、あっと驚かせるクライマックスだ*〈インディペンデント紙〉
- *「ムーミンのような顔はシンプルながら魅力があり艶のあるパステルカラーが美しい*〈タイム・アウト〉
- *高度に計算された構図と配色は芸術的であり、独創的だ*〈ヴァラエティ〉

興行収入

『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』フランス公開時の2016年1月末、観客動員数は全国では41,300人を超えパリでは約9,300人であった。その後上映が続くと203,100 人にのぼった。フランス国内では2015年から2016年の冬には長編アニメのフランス作品が７本公開されたが、そのうちの複数分を足しても『ロング・ウェイ・ノース　地球のてっぺん』の動員数には満たない：「Phantom Boy」(151,000)、『アヴリルと奇妙な世界』(117,000)、「Dofus, livre 1 : Judith」(84,000)、「Adama」(65,000)。